

いつもあなたと共にいる

# ドン・ボスコの風

BOLLETTINO SALESIANO • GIUGNO 2009

特集

## 教育を考える

今こそ必要なドン・ボスコの教育法

第1回 ● 座談会

「教育の現場から」-後編-

子どもたちに伝えたい3つのこと。

新連載

慈愛と祈りの人

## チマッティ神父

第一回・宣教地 日本へ向けて

NO. 3  
2009年6月

「風」のカレンダー 六月

# イエスの聖心

みこころ



## イエスの聖心みこころを思う月

イエスの聖心とは、イエス・キリストが自身の胸のあたりに指し示しておられる、燃え盛り、光り輝く心臓のことです。心臓はハート。それは、救い主イエス・キリストの、人類に対する限りない愛の象徴なのです。

十七世紀に聖フランシスコ・サレジオは、イエスの聖心を「愛の最高の表れ」と表現し、自らイエスの聖心に対して信心（礼拝と崇敬）を実践し、それを広めました。一六七五年の六月のある日、聖フランシスコ・サレジオが創立した聖母訪問会に所属し、後に聖女と呼ばれる謙遜な修道女、マルガリタ・マリア・アラコックの前に、イエスが姿を現しました。聖女の言葉によれば、イエスの聖心は、「燃え盛り、あたり一面にきらめく光を放ち、昼間の太陽よりも輝かしく、水晶よりも透き通っており、十字架上でお受けになった、槍による御傷がはつきりと現われ、茨の冠で囲まれ、その上には十字架が載つて」いました。そしてイエスは聖女に「人々をこれほどに愛した私の心をご覧なさい！」と言われ、「人々を愛するからこそ、悪魔によつて滅びの危険に瀕している人々を救い出したい。」と告げられたのです。イエスはさらにこの信心をどういう心をもつてするのか、いつ、どんな形で行うのかといった実践の方法と、それを行う人にはどんなお恵みがあるのかといった数々の約束を聖女に告げられ、この聖女によつてこの信心は教会に、そして世界中に広まりました。

ドン・ボスコもイエスの聖心の熱烈な実践者でした。一八八〇年、教皇レオ十三世の要請を受け、ローマにおける聖心大聖堂の建設に着手し、多くの困難を克服し、一八八七年五月十四日、その献堂式に参加する喜びに浴しました。この大聖堂は今も、ローマ・テルミニ駅の近くにそびえ、聖心の溢れる恵みの泉として、毎日多くの人々を迎え続けています。

日本に派遣された、サレジオ会宣教師チャムッティ神父とカヴォリ神父が、宮崎においてその創立に深く関わられた宮崎カリタス修道女会の名前は、イエスの聖心の愛（ラテン語でカリタス）に由来します。会員は、福音書（聖書）に描かれたイエス・キリストの慈しみと憐れみに満ちた聖心の愛に倣い従うことを理想として、日々の生活と活動に励んでいます。

（注）イエスの聖心を祝う日は、例年、聖体の祭日の後の、最初の金曜日とされています。今年六月十九日です。

宮崎カリタス修道女会 Sr.山中 タエ子



# 子どもの、教育を受ける権利

全ての子どもは教育を受ける権利を持っています。にもかかわらず、開発途上国の一部には、鉱山で重労働を強いられ、靴工場で有害物質を吸い込み、何も学ぶことなく早朝から深夜まで働かされている多くの子どもたちがいます。また先進国でも、教育に携わる組織や団体においてさえ経済的な利害が優先されています。

このような状況で私たちサレジオ家族は『ドン・ボスコの教育法』を実践しています。ドン・ボスコはトリノの刑務所へ出向いた時の印象を、自叙伝に次のように書いています。「十二歳から十八歳にかけての健康で体格もよく利発そうな多くの若者が、することもなくシラミにたかられて、精神的にも物質的にも飢えにさいなまれながら日を送っている姿に、わたしは戦慄を覚えました。」ドン・ボスコは心を揺さぶられ、祈りの家である『オラトリオ』に青少年を集め、

次のような規範を定めて教育に当たりました。

## 1 若者を中心に据えること

私たちの計画と活動の中心は若者です。青少年の声に耳を傾け、自分たちが持っている力に気づくように歩みを共にし、自らの生き方の計画に積極的に取り組むように助けます。

## 2 「予防の文化」を実現すること

非行を抑圧したり、罪を犯してから更生の働きかけをするよりは、「予防の文化」を実践し、多くの若者たちを負の体験の重荷から解放します。

## 3 共同体を体験させること

青少年が真理の探求を経験し、創造

力を発揮し、積極的に参加する場として、また、責任をもって社会の一員になることを学ぶ学び舎として、オラトリオ(ユースセンター)の中でグループ活動を体験させます。

## 4 統合的な教育計画に基づく場を与えること

青少年のニーズや期待に対し、統合的に応答するために、彼らを温かく迎える『家』を与えます。そして、彼らが自由に、生命力に満ちたエネルギーを発揮し、幸福と友情への望みを育てることのできる空間として『運動する場所』を提供します。

## 5 人権、特に子どもの人権を促進すること

私たち教育者は、いのちの文化を引き継ぎ、しかも構造の変革を促進する担い手として、人権を促進する義務を負っています。

ドン・ボスコのこれらの規範が、今、

私たちサレジオ家族の教育の規範です。教育は世界に向かって大きく開かれた窓であり、人類の意識を高め、人類を変容させる原動力になるべきものです。

出典：国連総会で『世界人権宣言』が採択されて六十周年の今年、サレジオ会ローマ本部で行われた『予防教育法と子どもの人権』というテーマの国際フォーラムでのチャーベス総長の話の要約



ヴァルドッコに設けられた最初のオラトリオ(ピナルティの家)

# サレジオ会創立一五〇周年を祝って

サレジオ会日本管区長 Fr.アルド・チプリアニ



## サレジオ修道会の創立

「水を飲むとき、井戸を掘った人を忘れてはならない！」という格言があります。起源を思い起こし先人の苦勞を思い起こすことは、人間にとってもとても大切な、豊かな行為の一つです。二〇〇九年は、世界の二三〇カ国以上に広がるサレジオ会にとって恵みの年です。サレジオ会創立一五〇周年を迎えた記念の年だからです。

一八五九年の十二月十八日は日曜日でした。多くの子どもたちと共に過ごした忙しい一日を終え、夕の祈りの後、午後九時に、ドン・ボスコは部屋に『聖フランシスコ・サレジオ会』に入ることを決心した人たちを呼び集めました。その時、ドン・ボスコは四十四歳、そして四十七歳のアラソナッティ司祭以外は、皆十五歳から二十四歳までの神学生でした。

この時の様子は、サレジオ会の最初の記録とし

て次のように記されています。「われわれは、危険にさらされた青少年のための事業に必要な、真の愛徳の精神を保ち、促進するというただ一つの目的をもって、同じ精神のうちに一致する。悲惨な時代にあつて、このような青少年は悪に染まり、神のいない、無宗教の状態に陥りがちであり、それは社会全体にとつても損失である。」

集まった人たちは次に、修道会を創立することを決めました。その目標は、会員となる自分たちの成聖（神様の御心になかうものとなること）を指して助け合いながら、神の栄光を伝え、特に導きと教育を必要とする若者たちの靈魂の救いを促進することです。

神の愛に応えて人のために尽くすということ、自己実現、つまり自分の成聖にもつながります。このような信念をもってサレジオ会は始まりました。

## 未来に向かって

私たちが今あるのは、これまでその働きを支えてくださった人たちの苦勞、努力、支えの実りです。この記念すべき年を有意義なものとするために、未来に向かって私たちにどのような働きを求められているかを、共に考えていきましょう。

サレジオ会創立一五〇周年は、全世界のサレジオ家族が記念しています。私たちは、日本の現状を知ることだけにとどまらず、アジアをはじめとする全世界にも開かれた視点を持ち、他の国々の青少年に対する取り組みの情報を交換することも、大切なことだと言えるでしょう。

次号の『ドン・ボスコの風』では、聖母マリアのご保護によって導かれた、この一五〇年の歩みと一緒に考えてみたいと思います。

## オラトリオにひとりの少年を迎え入れた。

司祭になって六年、この間ドン・ボスコはいくつもの問題に直面しながらも、少年たちと友人として共に過ごし、パンを与え、神様に出会えるように配慮してきました。ドン・ボスコは、故郷のベッキ村で老後をのんびりと暮らしていた母、マンマ・マルゲリタに、同じ家に住んで自分の事業を手伝ってくれるよう頼み、オラトリオのあるトリノに来てもらっていました。

一八四七年五月、ある雨の夜でした。夕食を済ませたドン・ボスコのところ、びしょぬれになった十五歳の少年が訪ねてきました。マンマ・マルゲリタはすぐに彼にタオルを渡し、温かいスープを用意しました。ドン・ボスコのやさしい笑顔を見て少し落ち着きを取り戻した少年は、すすり泣くようにこう話したのです。「僕は孤児で、数日前にヴァルセシアから来ましたが、仕事が見つからないし、持っていたお金も全部使ってしまいました。僕、行くところがないんです、どこでもいいですから今夜泊めてくれませんか。」それを聞いてマンマ・マルゲリタは涙をこぼし、ドン・ボスコも

胸を痛めました。以前、何回か気の毒な少年を泊めたことはあったのですが、彼らは翌日の朝早く、シートも毛布も持って逃げてしまおうでした。それを思い出してドン・ボスコは言います。「君が泥棒じゃないとわかれば泊めてあげてもいいんだけど。」すると少年は「僕はとても貧しいけど、人のものを盗ったこととはありません。」

その晩、ドン・ボスコは自分の毛布を使って、少年のために台所にベッドを作ってあげました。「今日はここで寝るといい。好きならここにいていいんだよ。私は決して君を追い出したりしないからね。」少年が寝付く前にマンマ・マルゲリタが「一緒に祈りましょう」と言うと少年は「母が生きているときには一緒に祈っていたけど、今はどう祈ればいいのかわからない」と泣きながら言います。「私たちと一緒に唱えればいいのよ」マンマ・マルゲリタはそう答えて一緒に祈った後、人間は仕事をしなければならぬこと、いつも正直でなければならぬこと、そして信仰を大事にしなければならぬことについて、ちよっ

とした話をしてあげ、最後に「ボナノッテ（おやすみなさい）」と言って少年を眠らせたのです。

この夜オラトリオに泊まった少年が聞いたマンマ・マルゲリタの話は、サレジオ家族の歴史上初めてのボナノッテでした。その後ずっと、今でも、世界中どこかのサレジオ家族の支部でも『ボナノッテ』のすばらしい習慣は続いています。

Fr. アキレ・ロロピアナ





## ドン・ボスコの教育法



司会(編集部) ドン・ボスコはどんな方法で少年たちを導いたんですか？

**雨宮** 方法のひとつとして、青少年に道理を教える、物事を納得させる、ということをしました。道理に込められた特に大切なことはコミュニケーションです。威圧的な方法ではなく、言葉を通して、つまりコミュニケーションを通して相手の心に通じるように伝える、というスタイルです。ですから学校の校則のような煙たいものも、少年たちは受け入れやすくなっていたと思います。

**大森** 納得といえば、私が職場にいたときのことですが、バスで行く合宿行事があり、校長として着任した最初の年からバスを時刻どおりに発車させました。実はその時子どもたちと同行する先生が一人まだ来ていなかったのですけれど、その先生を待たずに出発したんです。子どもを送りに来ていたお母さんたちはびっくりしていました。でも大勢の人が一つのことをするのに、たった一人が約束を守らないということは迷惑なことです。決めた事は守る、まして大人がそれを守らないなんてとんでもないことで、そんなことでは子どもたちを指導することなんかできません。これをやったお蔭で親も子どももなぜそうしたかを納得して

くれて、それ以降は何をするときでも誰ひとり遅刻をしなくなりました。

司会 道理というものは理屈だけではないということですね。日頃の考え方やか気持ちとか、中からにじみ出てくるものでなくては納得できないですよね。

**雨宮** そう思います。そのために教師にしても親にしても、日常的に子どもとどう向き合っているか、心の通う会話をしているかどうかということが大切なんですね。

## 私は愛されている



**稲川** そこに存在するのが愛じゃないでしょうか。親や教師が子どもたちを導くといっても、愛がなくてはそれはただの上下関係で成り立った指導でしかないわけですからね。ドン・ボスコの有名な言葉がありますね。「愛するだけでは足りません。子どもたち自身が愛されているんだ」と実感しなければなりません。」これですよ！

**切封** そのことでドン・ボスコさんに聞いてみたいことがあるんです。子どもたちが「私は先生から大切にされている、愛されている」と思っているかどうかは子ども自身に聞くしかありません。子どもたちは毎日毎日「私は愛されている。大切にさ



大森隆實氏  
(目黒星美学園小学校前校長)

れている。」なんて思いながら生活しているのでしょうか。誉められたから、何かを貰ったから愛されている。叱られたから愛されていない。そんな単純なことではありませんよね。古い考え方だけでなく、二十年、三十年と歳を重ねて初めて師の恩に気づくということもあるんじゃないでしょうか。その子の将来を見据えての、今この時の関わりが大切なのだと思うんですけど。

**稲川** 確かに愛を示すって難しいですよ、言葉や形ではないから。子どもたちがどう受け止めてくれるのか私も気になりますよ。私は子どもたちに向けているまなざしとか笑顔とか、いつでも聞いてあげるといふ表情でも伝えることができると思うんです。この間、グラウンドに立っていたら、学校の方から女の子たちが六人くらい「ワ、シスター！」って駆けてきたんです。そしてそばに来て「私のこと知ってる？」と聞くから、知らないわ、と答えたら、「えっ？ 名前覚えてないの？」と言いながら、六人がみな自己PRしてくれるんですよ。前に私がこの中一の子たちのクラスに行って話をしたことを、彼女たちはよく覚えていてくれたんですね。どの子も「シスター！ パン」って、ホームランを打った選手がベンチの前でやるように手を合わせて、笑顔で話しかけてくるんです。子どもたちは待ち望んでいるんですよ、大人がちゃんと自分と向き合ってくれることを。

**司会** まさしくドン・ボスコの言っている「慈愛をもって接する」ということですね。

**雨宮** ドン・ボスコの教育法はいろいろな本に書いてあるし、彼の精神について書かれたものを読んで僕もある程度理解しているつもりになっていきます。でもドン・ボスコがそこに至るまでは、小さい頃の貧しく厳しい生活体験や苦学生生活とか、神父になってから少年刑務所を訪問して、そこにいる本当に危険な目にあったり、問題を抱えている子どもにも直接関わったという経験があったからこそ、いわゆる弱者に対する視点をしっかり持ったわけですよ。だからどんな子どもも人格の価値は全く同じなんだという、ゆるぎない確信を持って若者を見ることができたんだと思います。ドン・ボスコが辿った道を、私たちが今の時代に実際に辿ることによって、ドン・ボスコに近い視点で、ものが見えるようになるんじゃないかと思っています。

**大森** ドン・ボスコの時代以上に今、本当に寂しい人が多いです、子どもから大人まで。そういう世の中だから、ドン・ボスコの精神を受け継いで「共にいてあげる」ことが大切だと思います。それを活かす場所は学校以外の所にもたくさんあると思います。でもシスターや神父様は修道会という一つの枠の中にいるわけだから、素晴らしい精神を持っていても働く場所としては物足りなさを感じるのではありませんか？

雨宮泰紀神父 (サレジオ会)





## 雨宮

そういう部分もありますが、一方で私たちも学校で働く役割が与えられる時はそこへ通ってくる何百人かの生徒とは関われるし、日曜日には教会やユースセンターに来る子どもたちと接することができません。そしてもし、いろんな理由で授業を受けられないような困難に直面している子どもがいたら、ここにドン・ボスコがいたら何をやるだろうかと考えながら、そういうところにこそ僕たちサレジオ会員がいかなくてはならないと思います。まずはそれぞれの学校や現在活動している内側から。そして今、そういう子たちが日本中に増えているっていうことは、今までのやり方とかシステムでは適応できなくなっているっていうことでしょうか？ サレジオ会やサレジオン・シスターズの学校でも、現状を謙虚に見つめ、今の子どもたちのニーズに応えられるようにしていく具体的な試みが始まっていると思います。

私自身は一つの試みとして、今住んでいる修道

院の近所にある公園などを、週に何回か夜巡回しています。そして若者に会ったら声をかけるようにしています。知らない人に、「こんばんは」とかって声をかけるのは結構勇気が必要ですが、でもそれができなければ、本当に寂しい人、苦しんでいる人に声をかけるなんてことができないはずがないですよ。はじめのころは警戒していた少年たちが、最近ではずいぶん彼らの方からいろんなことを話してくれるようになってきました。

## 稲川

サレジオン・シスターズの組織の中にも修道院という枠を超えてボランティア活動をするVIDES(ビーデス)というグループがあるんですが、ここは、どなたでも家族ぐるみで参加できるボランティア組織です。先日、学校の中でやりたいことを見つけることのできなかったお嬢さんが、「やっと自分の目標が見えた」とおっしゃって、このグループへの入会を決めました。家族ぐるみで

参加するということは、ママに連れられてきた小さいお子さんが、ボランティア活動をしている大人の姿を見てドン・ボスコの精神をキャッチしながら成長していくことですからね。この精神が次の世代へと自然に伝えられていくという喜びを感じています。

## 信念の源はキリスト教



**司会** ドン・ボスコは司祭ですから、当然その教育の中心にはキリスト教が貫かれているわけですね。キリスト信者の少ない日本ですが、カトリック学校としては、宗教をどのように指導の中に取り入れているのでしょうか？

**大森** 小学校の場合は、当然のことですが子どもたちに対してはいきなり宗教という言葉を使いません。「こんなに黒いアサガオの種からピンクや紫の花が咲く。」今まで当たり前と想っていたことがすごく不思議なことだと気がつきます。不思議探しから始まります。義務教育の九年間に子どもたちの心に信仰の種まきが少しでもできたらいいなあ、と思います。

**稲川** 宗教に全く無関心という人はいないと思いますから、それを知らせるという使命が私にはあると思っています。私自身が、生き方とか真理とか求めていたものがなかなか見つからない時、たま

たまイタリア語を習いに行った先がサレジアン・シスターズだったんですよ。そこでのキリストという方との出会いが、私の全生涯すべてを変えてしまったんですね……。

キリスト教に関心を持っていただくきっかけは、私の着ている宗教服かもしれないし、ある時は私の微笑みかもしれないし、ある時はちよつと優しく手を伸ばしたこともかもしれないし、何しろ私の人格のすべてがキリストを示しているっていうこと、それが私の使命だと思っています。

**切封** 私も経験したことですけど、子どもたちがとる行動にどう対応すればいいのかわからなくなつた時期がありました。そんな時、ある神父様から「キリスト信者の親御さんたちはそうではないでしょう。イエス・キリストという模範があるのだから」と言われたのです。その言葉で私は眼が覚めました。社会がどのように移り変わろうと、世間の価値観がどんなに変化しようと動じることはない。キリストという杖を持ち、キリストという目標を見失わないこと。その時、私の座標が定まったのです。

**雨宮** それですよ。ドン・ボスコは自分の教育法の大切な要素として、当然宗教、信仰を掲げています。教育とは人生に関わる問題ですが、いわゆる究極の問いに対して「人間の知恵」は答えを出しえないと思います。私たちを超えた視点を持つてはじめて、教育する側も教育を受ける側も、根幹とな

るものを持ちうると思います。

ですから、キリスト教の学校は遠慮なくキリストを前面に押し出せばいいんじゃないかと思うんです。最近では、これだけ価値観が多様化して、いったい何が正しいのかわからない、だから何でもありでいいんじゃないのか、と思う人が多いということでしょう。そういう人たちに「違ふよ、僕たちは自信をもってこの道を勧めるよ。二〇〇〇年の間ぶれることなく続いてきたキリストの教え、人が生きていくうえでとても重要な信念の基となるものなんだよ」と伝えられたらと思います。

### 三つの大切なこと

**司会** 今までのお話からドン・ボスコの教育の理念として、

- ・ 道理をわからせる
- ・ 愛をもって接する
- ・ 信念を持たせる

という考え方がはつきりしてきたように思います。教育の現場では、ここでは言い尽くせない難しい問題がたくさんあると思います。最後に一言ずつお願いします。

**切封** 私たちは不完全な人間だから間違いもあります。時には優しくできないときもあります。でも、いかに真剣にその時子どもに向き合ったかが大切なのではないのでしょうか。それに私たちは一





人ではないんです。志を同じくする仲間がいるのです。でこぼこの人間が集まり、足りないところはお互いに補い合い、助け合う。それが共同体、サレジオ家族ですよ。

教師一人ひとりのタレントとカリスマが、仕事を通して活かされる共同体であって欲しいと思います。先生方も自分に聞いてみるといいですね。私はその共同体の中で大切にされているかどうか、「期待されている」ではなく「大切に」です。家庭で、職場で、お父さんはどうでしょうか、お母さんはどうでしょうか。そして、私は皆を大切にしているだろうか。自分を振り返るにもいい機会だと思います。

**雨宮** 以前、サレジオの、ある学校で話したことなんですけど、この学校に入ったからにはもちろん勉強は大切。でも同時に「電車に乗ったら席を譲れる人にします」と、教育目標じゃないけれど、それくらいはっきりと言葉にできたらいいなと思っているんです。例えば、中高の六学年千人のうち百人が席を譲ったら、この学校っていい学校だなんて思いませんか？ 全員が譲ったら、その電車の沿線の雰囲気が変わりますよ。まあ、別に席を譲る事にこだわっているわけではないんですけど、「本校は席を譲れる人間を育てます」と、募集要項に書けたらいいですね。

**大森** 沿線が変わるところか、日本が変わりますね(笑)。私が思うことは、家庭と学校、それから地

域、この三つで子供を育てよう、とよく言われていますが、そうじゃないですよ。社会全体でしょう。ところが今その社会が、利益中心の、夢も希望もない状態に陥っている。大人社会のモラルの低下が、子どもたちにも影響しているのです。私たち一人ひとりが人間としてのあるべき姿をもう一度考えることが大切だと思います。そうすることによって、ドン・ボスコの心に近づくことができるのではないのでしょうか。ドン・ボスコも子どもの真の幸せを考える修道者、教師、親であってほしいと願っているに違いありません。

**稲川** 神父様たちの役目、シスターたちの役目、それぞれあります。そして限界もあります。でも、この日本の社会の中でドン・ボスコの風が吹きまくるために、ドン・ボスコの精神に触れた神父様方、シスター方、先生方、ご両親のみなさんが力を合わせて協働したら、世の中変えることができると思います。それぞれは力不足でも、声を掛け合って一つになって動けば、何かが生まれるって信じています。

**司会** 百五十年経って色あせるどころか、ドン・ボスコの子どもたちへの教育に対する考え方がますます新鮮なもの、現代に必要なものだと感じる事ができました。みなさまありがとうございます。

サレジオ家族訪問

# 星美学園小学校へようこそ（東京・赤羽）



星美学園小学校

東京都北区赤羽台4-2-14

創立： 1947年10月

児童数： 757名（2009年度）

教職員数： 54名（2009年度）

同敷地内に幼稚園・中学校・  
高等学校・短大を併設

星美学園小学校は東京の北に位置し、眼下に荒川、三方に近県の山々を望む縁あふれる、サレジオン・シスターズ本部修道院の近くにありま  
す。学校長の田松三男先生にお話を伺いました。



## 種を育てる努力

子どもたちにこう話しています。

「神様は私たち人間を造る時、一人ひとりの中にいろんな種を宿して下さったんだよ。でもその種は、ただ転がしておいただけじゃ、芽は出ない。それを育てるためには、君たちの種を蒔く努力が必要なんだよ」と。その努力とは、クラスやクラブの仲間と一緒に課題に向かって本気でチャレンジするということですよ。そのため種を蒔く場づくりということがあります。その場を提供し、導いていくのが教師の務めです。

## 賞は努力の結果

子どもたちは昨年度も学力や体育



面で成果を挙げたほか、読書感想文や読書感想画コンクール入選、ブラスバンド部の活躍や聖歌隊によるNHK全国学校音楽コンクールでの金賞受賞など、全国規模の発表の場で果敢にチャレンジし、高い評価をいただきました。



賞をいただくことは子どもたちにとって励みになることですが、指導する時は全くそのことを目的にはしていません。たとえば我が校の聖歌隊は『日本一歌をうまく歌う学校』なのではなく『日本一美しい歌心を追究していく学校』なのです。その



ために子どもたちは努力をしています。その成果が皆さんの心に響く歌声として受け止めていただけたんだと思います。

子どもたちはこういう体験を通して、気力や能力がぐんぐん伸びていくことに気付いていくんですね。これが発芽です。次には茎を伸ばし、葉を茂らせ、花を咲かせ、そして実が成るまで努力を続けていく、それは根本的には生きる力とつながっているんですよ。今、その力を育てている大切な時期だと思います。



**良い先生に恵まれて**

ドン・ボスコがそうであったように、良き教師に巡り合えた子どもは幸せです。だから、私はどの教員にも良い先生になって欲しいなと思っています。筑波大付属小の先生方の指導を受けて研修を続けているのもそのためです。また、自分の担当しているクラスだけではなく、先生方がチームを組んでどのクラスの子ともとも広く関わられるようにしています。教員一人ひとり違った良さを

もっているのですから、先生方の数だけ子どもたちも豊かなものを身に受けていけるからです。

**辛島美登里さんと**

今年二月の話ですが、シンガーソングライターの辛島美登里さんが、ご自分のクリスマス・コンサートで会場の皆さんに呼び掛けて集めたお金を「世界の恵まれない子どもたちへの教育資金の一部に」とお届けくださいました。

辛島さんと私たちのつながりは、もう四年ほど続いているんです。辛島さんのクリスマスコンサートに、うちの聖歌隊がゲスト出演しているんです。辛島さんは「今までコンサート会場にいるお客さまに募金をお願いする、ということは恥ずかしくてなかなか言い出せなかったのですが、こちらの聖歌隊の皆さんと一緒に歌ったり、皆さんの聖歌を聴いているうちに、勇気を出して呼び掛けることができるようになりました」と言っておりました。

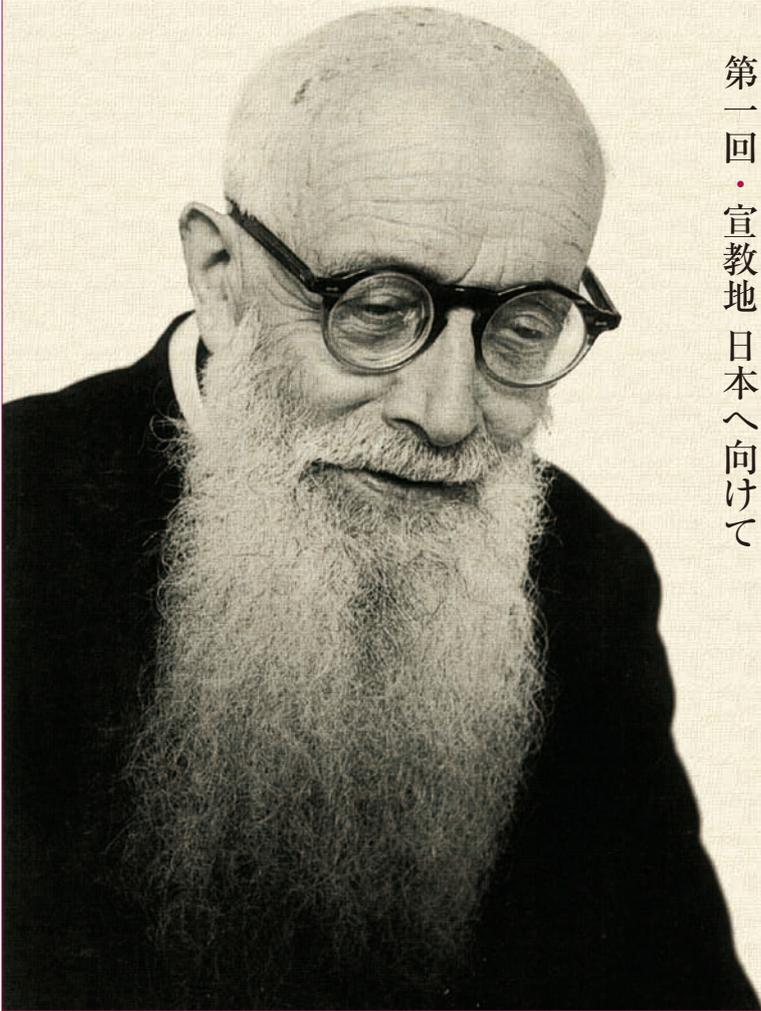


お訪ねした日のことです。先生は下校途中の低学年の女子児童数名に囲まれていました。「校長先生、あのね、お話ししたいことがあるんです」「そうですね、何でしょうか？」とおっしゃるなり、ひざを折って生徒の目線にかがまれた田松校長先生の姿の中にドン・ボスコを見たような気がしました。

# 慈愛と祈りの人 チマツティ神父

サレジオ会創立一五〇周年にあたり、その歴史をふり返る時、  
八三年前にドン・ボスコの心を日本に初めて伝えた  
宣教師たちの働きを忘れることはできません。  
その道程を回を追ってご紹介します。

## 第一回・宣教地 日本へ向けて



その日チマツティ神父は、喜びと高揚で天を仰いでいたに違いありません。サレジオ会がローマ教皇より日本の宣教地(宮崎・大分)を任せられることになり、宣教団の団長としてチマツティ神父が選ばれたからです。その日の日誌に、彼はこう書いています。

「今日をもって、任期(編集者注…校長、院長職)が終わる。これから新しい考え、新しい志……。日の出の国、桜の花、菊、米、火山、地震……。素晴らしい自然の宝庫、喜びの涙が出る。ああ、日本! これからこそ、私に神が必要となる。新しい生活が始まる。たくさんの笑いや喜びがあるだろうが、多くの苦しみもあるだろう。」  
(一九二五年七月十八日)

このチマツティ神父こそ、日本のサレジオ会の礎となり、今あるサレジオ会事業の基を造った方なのです。

### ドン・ボスコをごらん…

ヴァインチェンツォ・チマツティ、彼は今から一三〇年前の一八七九年、イタリア中部ファエンツァ郊外

の貧しい家の六番目の子として誕生しました。両親も兄弟も小さな彼に神様の話をし、熱心に祈り、そしてお互いを思いやる温かい家庭に育ちました。彼が三才になる少し前の頃です。ドン・ボスコが、サレジオ会の学校を開くために彼の住む町に来ました。彼を一目見ようと、教会を埋め尽くすほどの人々が集まっていました。ドン・ボスコの話に感動した母は、抱いていた子を高く差し上げて「ヴァインチェンツォ、ドン・ボスコをごらん!」と叫んだのです。

このことは彼の心に深くふかく刻まれました。晩年になって、懐かしさと感動に満ちた口調で次のように語っていました。「私は本当にドン・ボスコを見ました。今でもあの顔、とりわけ母のあの叫びをよく覚えて





います。……あの時、私の兄も一緒にいました。ドン・ボスコは、その時から私たち二人を自分のものにしたのです。」

その頃から彼は、兄ルイジの肩車に乗って、サレジオ会員がこの町に開いたオラトリオに通っていました。スポーツの試合を見たり、大きな声で歌ったり、劇を観たり……。しかし彼はまだ幼かったので、よく転んでおでこを強く打ちました。そんな時は先生が彼を抱き起こし、こぶがでさないように銅貨をあてがって包帯をしてくれました。

若きサレジオ会員

数年後、兄ルイジがサレジオ会に入会しました。九才になった彼も、サレジオ会の学校に寮生として入り、七年間をここで過ごすことになりました。彼はここで熱心に勉強



兄ルイジと神学生時代のチマッティ神父 (右側)

し、偉大なるドン・ボスコの精神を学びました。この時代の学友だったある神父の証言は、子どもの頃の彼の姿を浮き彫りにしています。「……優秀だった君は決まってクラスの上位だった。先生たちはみんな僕らを愛してくれていたが、とりわけFr.リナルディ院長(後の第四代総長)は僕らの父のようだった。休み時間は君も僕も彼の側に行ったね。あの時遊んだことを覚えているかい、君は足が速く、徒競争ではいつも一番だった。君は学芸会で、演劇で、聖歌隊で、みんなの注目を集め拍手喝采を浴び皆から愛されていた。でも君は得意になる素振りを少しも見せなかった。」

学友だった別の人はこう付け加え

ています。「彼の善良さは、友達との間に壁を作るどころか、みんなに広がるものでした。だからみんな彼と付き合おうと競ったし、いつも一緒にいたかった……。」

ある時、南米から帰国した宣教師たちが「あの土地の子どもたちは貧しく、ハンセン病などで死んでいく者も多い」と話すのを聞き、自分もいつかは遠く貧しい宣教地に行きたいと思ひ、十六歳の時には、サレジオ会に入会することを決めていました。すでに兄も姉も修道院に入っていたため、母をひとりきりするのには心配でしたが、母は快く賛成してくれました。そして翌年、十七才で終生誓願(一生涯を神に捧げる誓い)

を立て、サレジオ会員としてヴァルサリチエ学院に入りました。

叙階と宣教への思い

ヴァルサリチエ学院は、新しくサレジオ会員になった者がさらに養成を受けるところです。彼が入る八年前に、ドン・ボスコは天に召され、その遺体がこの学院に安置されました。優秀だった彼は、この学院で司祭になるための勉強を続けながら多くの仕事を与えられました。二〇代から三〇代の間には、下級生や高等学校で教えるために必要な資格も仕事の合間に取得しました。一九〇〇年にパルマ音楽大学で高校音楽教師の資格『コーラスのマエストロ』のディプロマ(免許状)、トリノ大学で農学の博士号、哲学・教育学の博士号などです。音楽は博士号ではなく、免許状だけでしたが、もともと音楽が大好きだったので、この後亡くなるまで、キリスト教を広めたり、青少年の教育のためにその才能を大いに生かしました。お祝いや典礼(キリスト教の儀式)のための歌や、オペレッタを数多く作曲しています。教師としては、授業がわ



パルマ音楽大学のディプロマ（免許状）

かりやすく、物腰が温和で兄弟のように生徒に接したため、心から生徒に慕われていました。上から押さえつけることはせず、納得させるといふ、ドン・ボスコの教育法の模範だったのです。

驚くべきことは、これだけの資格を取得するために勉強した学生であり、生徒に教える先生でありながら、その忙しさの中で一九〇五年に司祭に叙階（神父になること）されていることです。

哲学の学位を取った時、神学生の

一人が「先生、次はどんな学位を取られるのですか？」と聞きました。彼はちよつと黙った後、微笑をたたえながら一言ひとこと力を込め、はつきりと言いました。「宣教師になる恵みを神からいただくためなら、全ての学位を投げ捨てても構いません。」

第一次世界大戦中の困難な情勢下、学校で教えながら、オラトリオの責任も担い、トリノで初のボーイスカウト隊を作り、貧しい人々の救済のために精力的に働きました。暗い時代でも快活で明るく、決して微笑みを忘れませんでした。戦後は再び、学校長、修練長、院長などの役職を務める忙しい毎日の中で、作曲や出版もこなしました。その時に作曲した『黄金の冠』という合唱曲は、マリア像に冠を飾るための歌ですが、同じ頃に亡くなった母に捧げたものと言っても過言ではないでしょう。母親が亡くなったことにより、再び宣教師として派遣されることを強く願うようになりました。

日本へ向けて

円熟期に達し、たくさんの事業を

宣教師とは……キリスト教布教のため、外国に派遣される聖職者。派遣されて異国で伝道する人。成した彼への称賛は大きく、人々が彼をいかに愛し、満足していたかは計り知れないほどでした。しかし彼自身の心がどうであったかは、総長宛ての手紙の言葉に表されています。

「尊敬すべき総長リナルディ神父様……どうか私のためにお祈りください。そして、私が赴く宣教師として、より貧しく、より苦勞の多い、より見捨てられた場所を見つけてください。どうも居心地の良い場所は私には合わないのです。どうか、今度こそ、願いをお聞き入れください。」

（一九二三年十一月九日トリノ）

『チマッティ神父の手紙』より

この手紙が総長に送られた時、まさに冒頭のローマ教皇からの打診があり、一年半ほどの準備期間を経て、サレジオ会の宣教師派遣五〇周年記念事業として、日本へ宣教師を派遣することが決まったのです。彼の「今度こそ」が叶いました。派遣前に『教育者ドン・ボスコ』という予防教育法についての本を完成させたチマッティ神父は、まさしくそのドン・ボスコの部屋で総長リナルディ神父

から宣教師の十字架を受けました。そして、教皇ピオ十一世に謁見し、祝福を受けて準備は整いました。

一九二五年十二月二十九日、チマッティ神父を団長とする宣教師たちはジェノヴァ港から日本へ向けて『フルダ号』に乗船しました。その時、チマッティ神父は四六歳でした。（つづく）

日本へ向かうフルダ号船上にて・前列右から三人目がチマッティ神父



ドン・ボスコ女子在俗会(通称VDB)とは、一口で言えばキリスト教徒として、一人ひとりがイエスキリストの教えに従って生活することによって、社会の人々にまことの幸福を知らせることを目指しています。

聖ドン・ボスコがサレジオ会を立ち上げるとき、壮大なビジョンを描いていました。不安定な世の中で危険にさらされている若者を救うために三つの異なる性格のグループが協力し合うこと、つまり一つ目は、人生と時間のすべてを若者のためにさげる修道会、二つ目は、世に留まりながら良き社会人として社会を向上させようとするグループ、そして、三つ目は、一般家庭人としてこ



人々の中のVDB

## ドン・ボスコ女子在俗会 (通称VDB) どんなときにも ゼイクドモ あなたのために

れらグループと協力し協働する信徒からなるグループです。しかし、当時、ドン・ボスコの雄大で斬新な構想は時代をはるかに超えており、理解されない危険がありました。そこで、ドン・ボスコは第二のグループの活動をおしすすめませんでした。「ドン・ボスコの生き写し」と呼ばれ、ドン・ボスコのビジョンをよく知っていたリナルディ神父(第四代総長)は、サレジオン・シスターズのもと

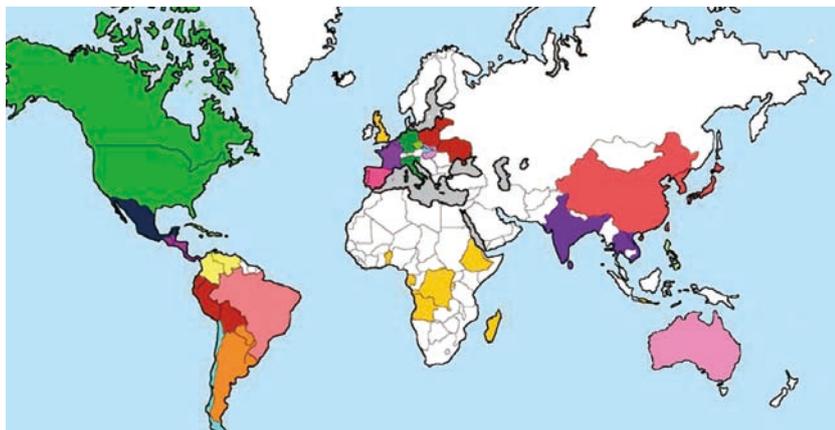
に集う若い女性たちの指導にも力を尽くしていました。そのうちの三人が自分たちの家庭や職場の中で、身をささげて修道者のように生活したいと願ったのです。一九一七年五月二十日、VDBが始まりました。リナルディ神父が亡くなられた後も会員は増え続け、今では全世界に千三百名を数えます。VDBは共同生活をしません、お互いに共通の精神の中に生活して

います。一人ひとりの置かれた状況や職業も異なりますが、互いを支える深い友情でひとつに結ばれ、全世界に広がるひとつの家族となっています。

VDBは自分の生活、自分の行動にすべて責任をもって生きていきます。そのため、VDBは経済的に自立した独身女性です。VDBはまた、成熟した女性であることが求められます。

VDBの霊性は聖ドン・ボスコの霊性です。明るく楽天的で活動的です。自分自身を他者への、特に若者への贈物としてささげることを選んだ女性たちです。会員がその活動を有効に行うため、特別な身分であることを口外しません。

VDBはサレジオ家族の一員として他のグループと協力し、社会を向上させる「新しいうねり」をつくっていきます。



トリノ(イタリア) から世界へ

# ドン・ボスコの風が、浜松に

Fr.アンヘル 山野内 公司 (浜松教会主任司祭)

昨年の末、経済危機が火事のようにあつという間に浜松にも燃え広がり外国籍の多くの人々が仕事、住まい、そして夢、希望を失いました。その結果食することに困った人々、学校に行けなくなった子どもたちが、助けを求めて大勢教会に来しました。

浜松教会では、困っている人々を助けるボランティア・グループ「ベタニア会」を立ち上げました。早速様々ところから、特にサレジオ家族と関係するところから次々と支援金や支援物資が届き、現在に至るまで助け合いが続いています。

四月末までに、七〇〇余りの食料セット(フードバスケット)を配り、ブラジル学校が閉鎖になって行き場のなくなった四〇名の子どもたちに学習支援、給食、教材提供と送迎を行うことができました。また第二と第四の日曜日にはミサの後、約二〇〇人から三〇〇人の食事会も実現することができました。さらに、四月二〇日からは学習支援第二プロジェクト

がスタートし、六才から九才の二〇名、十才から十六才の三〇名の子どもたちが通って来ます。

私たちは驚きと喜び、感謝でいっぱいです。もしかしたらこのような困難な状況だからこそ、サレジオ家族としての意識が目覚め、強められたのかもしれない。サレジオ家族のみなさん、この運動を続けることができますよう、これからもご支援をよろしくお願いします。



この支援活動の詳しい様子は、浜松教会のホームページ( <http://www.geocities.jp/hamamatsukyokai/rinzi/houkokuh.html> )でご覧いただけます。

また、サレジオ家族の様々なグループが、それぞれの方法で支援活動をしています。一部をご紹介します。



サレジオン・シスターズとウニオーネ(サレジオン・シスターズ同窓会)代表者  
「支援活動を始めるにはまず実情を知ることから」と、すぐに現地を訪れました。今、サレジオン・シスターズには、次々と支援金や支援物資が集まっています。



**DBVG(ドン・ボスコ海外青年ボランティアグループ)**  
 浜松は何年も前から日本のボランティア活動拠点です。この日も休日を利用して支援物資を届けがてら、ずっと現地で支援を続けているシスターたちと合流して、子どもたちと遊んだり、勉強の手伝いをするために東京から駆けつけました。



**ボーイスカウト調布2団**  
 調布教会の日曜日のミサの後、自分たちで作ったカレーライスを販売。この日の純益は、子どもたちが相談し、今まで自分たちの活動資金としてプールした分と合わせて浜松に寄付することに決めました。「お母さんや給食を作る人の気持ちがあわかった」と話してくれた子もいました。



**星美学園小学校**  
 浜松の実情をシスターから聞いた児童会の委員が、みんなと話し合って支援の方法を決め、全校児童に呼び掛けました。保護者の協力を得て、たくさんの支援物資が体育館に集められ、子どもたちが車に運びました。その荷物は神父様と神学生が、ワゴン車二台に満載して浜松へ向かいました。



**調布教会浜松支援グループ**  
 募金活動のほか、寄贈された米、リンゴの販売、ランチの提供で寄付金を集めています。六月にはチャリティ・コンサートを開催します。また、「利益は小さいけれど、まずできることから始めましょう」と、近くの農家の協力を得て野菜を収穫し、日曜日のミサの後、教会で販売しています。

## 教育という 使命のもとに

四月初めのある日、赤羽にある星美学園の敷地内のあるこちらの建物から、大勢の人が聖堂に向かつて歩いていきます。「これから何が始まるんですか?」という質問に、Sr.茅野星美学園小学校教頭が答えてくださいました。「新年度の初めに、学園の幼、小、中、高、短大の全教職員が聖堂に集まってお祈りをし、新任の先生方が紹介されます。ここで全職員と一緒に子どもたちのために祈るということは、私たちがサレジオ家族の一員であることを自覚させ、ここに通ってくるどの子ども大切にしようという思いを強めてくれるので、よかつたら一緒に行きましょう。」

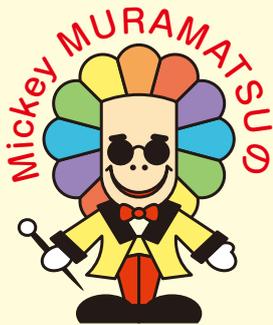
聖堂の中で、「今年度も星美学園に通う、幼児、児童、生徒、学生のために、心を一つにしてドン・ボスコの予防教育法を実践していくことができますように、共に祈りましょう」という招きのことばに続いて、ドン・ボスコの一八七七年から一八八四年のメッセージをまとめた『若者を育てるドン・ボスコのことば』の一節が朗読され、その後それぞれの立場から共同祈願が唱えられました。そして、Sr.鈴木裕子理事長が「今年是非常勤の先生を含めて全部で二五二名になります。二千名近くの園児、児

童、生徒、学生に対してこれだけの職員、先生方が心を一つにして、ドン・ボスコの教育を行うということは素晴らしいことで、子どもたちにとっては大きなお恵みだと思えます。私たちは、どのような職種、立場であっても全員が教育という素晴らしい使命を、共に果たすように呼ばれてここに集まっております。辛いことや難しいこともたくさんあるでしょうが、いつも神様のみ旨を求め、子どもたちの善のために働いているという喜びが常にありますように。」と挨拶された後、Sr.上原順子学園長が、星美学園教育共同体を船にたとえ、見張る人、舵をとる人、帆を張る人、機械室で働く人と、一人ひとりが様々な役割を担っていること、そして、そこに青少年と、その家族が乗船し、大海原を航海していくためには何が大切かを話され、続いて「教育とは、ドン・ボスコにとって救いの保障、人の存在を包み込んで、人として生きていく上での道を照らす光のようなものでした。現在、教育環境は受験を通して手に入れる厳しいものではありませんが、いったん入学したからには、その人全体を包み込んであげるような、暖かさで支え、人生の指標を感じさせるものであつてよいのではないのでしょうか。」と語られました。

そして最後に、「こちらの修道院には、四三名のシスターが住んでおり、先生方のために、先生方を支えておられるご家族のためにも、ご健康と幸せを、お祈りしております。」という心強い言葉がありました。

サレジオ家族の他の教育事業所や施設でも、それぞれのやり方で心を新たに新年度をスタートした事でしょうが、この日の「学校法人星美学園職員の集い」を通して、一五〇年経った今も「ドン・ボスコの教育者の心」は確実に伝えられていることを実感しました。





[イラスト：ヨーヘイ]

## みことばマジック

だから、こう祈りなさい。

「天におられる私たちの父よ……」

(マタイ福音書6章9節～13節)

何の本だったか忘れてしまいましたが、その1ページには、こんなことが書かれていました。

「たまには祈りなさい。自分以外の人の幸福を。」

人は祈る時、大抵自分のしあわせを求めてだったり、自分の益となることやよるこびを求めて祈ることが確かに多いと言えるでしょう。この言葉は、そんな自分のことや自分の思いばかりに目が向きがちな人の心を反省させるものです。

さて、あなたの祈りはどうですか？

聖書のおはなしの中にはイエス様が、どのように祈ればよいか人々に教えておられるところがあります。それがタイトルで示しているところです。教会では、その祈りを「主の祈り」として大切にしています。先ずどんな祈りか見てみましょう。

天におられるわたしたちの父よ、

み名が聖とされますように。

み国が来ますように。

みこころが天に行われるとおり

地にも行われますように。

わたしたちの日ごとの糧を

今日もお与えください。

わたしたちの罪をおゆるしてください。

わたしたちも人をゆるします。

わたしたちを誘惑におちいらせず、

悪からお救いください。

ここで先ず注目して欲しいところは、神様を「父」(原文は「アッパ」：アラマイ語)と呼ばせておられるところです。日本語では「父」と訳されていますが、もっと正確に訳すと「おとうちゃん」とか「パパ」という言い方になる言葉が使われているのです。つまり言葉を覚えた

かまだ覚えないかぐらいの幼い子どもが父親を呼ぶ時の言葉を使わせておられるのです。

神様のことをそう呼ばせることによって、神様は私たちにとって遠いかげ離れた存在ではなくて、実に身近な方、100%の信頼を寄せることのできる方であることに気付かせようとしているのでしょう。また逆に神様にとって私たちは、まるでほっとけない赤ん坊のように思われている小さな者であり、その関係・つながりの本質も、おとうちゃんが甘えん坊の小さな息子・娘を膝のうえであやすようにして愛しく接するイメージと重なるようにされたのではないのでしょうか。

だからイエス様が私たちに使わせる「父」という言葉は、人間と神様の距離をぴったりとくっ付けるほどに縮めるマジックワードと言えるでしょう。

もう一つ注目して欲しい言葉があります。それは「わたしたち」という言葉です。イエス様は、「わたし」ではなく「わたしたち」と言う言葉を使わせることによって、その祈りが「自分のためだけ」の祈りではなく、自然とみんなの祈りになるようにしてくださったのです。このために、この「主の祈り」は自分以外の人も含めた素敵な祈りになっているのです。もうひとつのマジックワードがここで使われているわけです。

イエス様の教えてくださった祈りは、父である神様を賛美し、その神様の思いが実現するように、そして私たちみんなが必要とするものを求める祈りになっています。単に自分の好き勝手な思いが実現することを求める自己中心的な心を解放させ、欲しいものではなくて、本当に必要なものが与えられることを祈るように招いて下さっています。

祈りのポイントのタネが明かされたところで、もう一度、自分の祈りや神様との関係・つながりを振り返ってみてはいかがでしょうか。

Fr. Mickey MURAMATSU(村松 泰隆) サレジオ会司祭

## サレジオ会新管区長就任

聖フランシスコ・サレジオの祝日の一月二四日、調布サレジオ神学院聖堂でサレジオ会新管区長アルド・チブリアニ神父の就任式が行われました。式の最後に新管区長は、前管区長オランド・プッポ神父に、これまでの六年間の奉仕と犠牲への感謝の言葉を述べ、ご自身もサレジオ会総長から与えられた使命を、サレジオ家族の助けを得ながら実行する決意を固められました。

【Frチブリアニ略歴】イタリアにて一九四九年生。一九七〇年来日、一九七七年司祭叙階。一九八六年より二〇年間ドン・ボスコ社の責任者。

「トリノで宣教師を目指していた16歳の時、サレジオ会・日本宣教師団団長のチマッティ神父の訃報に接して、自分の父が亡くなったように感じました。」(談)

司祭叙階：神父になること



前管区長 Fr. オランド・プッポ、副管区長 Fr. 濱崎敦との共同司式ミサ

## 若い力が注がれる修道会 修道会で初誓願式、終生誓願式が行われる

宮崎カリタス修道女会では、昨年の十二月八日に初誓願式が、またサレジオ会では、今年三月二五日に初誓願式と終生誓願式が執り行われました。

宮崎カリタス修道女会 初誓願立願者

マリア・ミッシェルヒュン・テイ・トゥウ  
ハー(ベトナム 中南部カン・ワー省出身)



サレジオ会 初誓願立願者

ヨハネ・ボスコ 谷口亮平(福岡出身)

ヨゼフ・グエン・カック・テイエツフ

(ベトナム タン・ホア県ハウ・ロク市出身)

アンドレ・トラン・ミン・ハイ

(ベトナム ラム・ドン県バオ・ロク市出身)

ヨセフ・グエン・ズイ・ヒュン

(ベトナム ラム・ドン県バオ・ロク市出身)

サレジオ会 終生誓願立願者

パドアのアントニオ・ブイ・ズイ・トゥイ

(ベトナム ドンナイ県ジャキエム出身)

初誓願とは、修道者になることを目指して、自分の希望する修道会で一定の期間養成に励んだ者が、神と教会に仕えることを誓う最初の式。

終生誓願とは、初誓願後通常六年(最長九年)の間に、決められた過程を修めた後、生涯を神に捧げることを誓う式。

終生誓願立願者 トウイさん挨拶から

日本に来て三年間社会人として働き、自分の人生を振り返った時、神様の呼び掛けにこたえる決心をしました。初誓願から今日までの六年間、そしてこれからも勉強を続けながら、一生かけて神様のために奉仕したいと思えます。ベトナム戦争の後、一九八〇年にポートピープルとして脱出した家族、親せきの七人に、私は特に感謝します。今日私がここにいるのは、そのおかげです。これからまだまだ長い航海を続けていきます。どうぞお祈りください。



左からティエツフさん、ハイさん、Fr.チブリアニ管区長、ヒュンさん、谷口さん、トウイさん

計報安らかに憩われますように  
一月九日、Fr.鈴木勝重 享年六六歳



日向学院、サレジオ高専の校長を歴任。日向学院校長時代、毎朝校門で生徒を迎え、一人ひとりに声をかけ、千人を超える生徒の名前をほとんど覚えていたそうです。

四月十六日、Fr.ヨゼフ・ヘリバン 享年八三歳



宣教師として一九五七年来日。サレジオ神学院、上智大学神学部等で教鞭をとる。赤羽のサレジオン・シスターズ本部修道院指導司祭、またサレジオ会大阪支部院長を歴任。その後ローマの教皇庁立サレジオ大学に異動。聖書学を担当。

## ドン・ボスコの棺がヴァルドッコを出発

【トリノ】サレジオ修道会創立150年を期して4月25日、ドン・ボスコのご遺体(レプリカ)の棺が、130カ国をめぐる6年間の巡礼のためにヴァルドッコにある扶助者聖母大聖堂を出発しました。チャーベス総長はこの意義を次のように語っています。「私は親愛なるドン・ボスコが、私たちが働くすべての国を巡ることにより、彼を身近に感じる機会を作るとはとても重要なことだと考えます。ドン・ボスコも未来の希望の基、つまり多くの若者とその家族のもとへ行きたいと望んでいるのです。」



## from Readers

本誌へのご意見、ご感想、ご要望をお寄せください。

私たちがつい「福音宣教」、「キリスト者」という言い方を普通に口にする、「それは何ですか」と、よく質問されてしまいます。「ドン・ボスコの風」は、この点について配慮されていて、「とても読み易い」と言われました。(東京・J.A.さん)

親子でサレジオ家族のメンバーです。貴誌の内容はわかりやすく読みやすく、非信者の方々にもよいと思います。(大分・Y.M.さん)

表紙の子どもの写真をはじめ、どのページからもドン・ボスコの精神とその魅力が伝わってきます。サレジオ家族のいろいろなグループの紹介も、写真つきでとても興味をそそられる内容です。(ローマ・Y.S.さん)

息子が今春、ドン・ボスコの学校を卒業し寂しく思っておりました。お懐かしいシスター方のお姿をうれしく拝見しております。(東京・M.A.さん)

平易な読み易い文章と深い内容、是非続けて読ませていただきたいと思えます。(松戸市・M.K.さん)

宮崎カリタス会とドン・ボスコとの妙なるつながりの深さを初めて知りました。会の創立者の方がドン・ボスコの精神を受け継がれて、常に弱者と共にその支えになり、奉仕することを会の精神とし、目標にされていることはほんとうに素晴らしいことと思ひ、深い感銘を受けました。(藤井寺市・Y.I.さん)

聖ヨハネ・ボスコが創刊した "Bollettino Salesiano" の日本版「ドン・ボスコの風」は、創刊者の方針により、できるだけ多くの方々に無料でお届けすることになっております。そのために様々な努力をしておりますが、この雑誌の趣旨にご賛同くださる方には是非ご援助いただきたく、今号よりゆうちょ銀行の払込取扱票を添付してお届けします。通信欄にお書きくださるメッセージは、本雑誌で取り上げさせていただくこともございます。払込ご依頼人欄にお書きくださった個人情報、編集事務局にて大切に保管・管理させていただきます。

郵便振替 口座番号 00100-7-412947 加入者名 「ドン・ボスコの風」編集事務局

お振込の際に、添付の払込取扱票をご利用くだされば、手数料はかかりません。

今までにご寄付をお送りくださった皆様に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

## ドン・ボスコの風 No.3

BOLLETTINO SALESIANO

2009年6月19日発行

編集人 梅村 護

発行人 アルド・チブリアニ

発行所 サレジオ会「ドン・ボスコの風」編集事務局

〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22-12 サレジオ管区長館

電話：03-3353-8355 Fax：03-3353-7190

Eメール：DB-no-kaze@fiberbit.net

郵便振替 00100-7-412947

アートディレクター 後藤 宏幸

## from the Editor

編集後記

ドン・ボスコがオラトリオでの活動を通して実践した教育の理念が脈々と引き継がれ、サレジオ家族のそれぞれの事業に生きています。そして今回、日本のサレジオ会の祖であるチマッティ神父を紹介するシリーズが、満を持していよいよスタートしました。ドン・ボスコが巻き起こした風が、今私たちの周りを駆け巡ります。(M)

# 種は木に、そして木は森になった。

青少年を救うための幅広い運動に  
サレジオ家族で邁進していきましょう！

2009ストレンナ

総長 Fr. パスクアール・チャーベス

ドン・ボスコの心の中に生まれた種は、150年の間に芽を出し、成長して木になり、そして今、森へと成長しました。  
150年の節目にあたり、ドン・ボスコの心に立ちかえり、これからもますます運動を起こしていきましょう。

運動とはドン・ボスコの心をこの社会の中に広めるサレジオ運動のことです。

それは「サレジオ家族」という限られたものではなく、若者自身、その父母、サレジオの精神を理解し協働してくれる方々、ボランティア、サレジオの事業に共感してくれる人々、恩人、日本だけでなく世界中のキリスト教徒以外の人も含みます。

皆さんは、何らかの形でサレジオ会の使命、あるいはサレジオのカリスマを共に持つ人々です。

皆さんは「ドン・ボスコの友人たち」です。サレジオ家族を中核に、大きな運動の波紋を広げていきましょう。

(チャーベス総長による「ストレンナ2009解説」の日本語訳から要約)